巻頭言

「RCC就職レディネス・チェック」活用の今日的意義を考える

筑波大学 名誉教授
渡辺三枝子

本誌が「RCC就職レディネス・チェック」を特集する機会に、RCCの開発に着手した経緯を紹介させていただきたい。開発に2年をかけ、公表から5年を経た今、RCCの今日的意義を考えることは開発者の責務であり、その開発過程を振り返ることは、現在、目の前の学生の就職指導に役立つ用具であり続けるために必要であると思うからである。

開発チームはそれまで職業レディネス・テスト(VRT)やVPIの開発に携わり、多くの教育機関の就職・キャリア支援担当者及び学生との接触を重ね、大学の就職、キャリア支援が直面する課題を垣間見続けてきた。学生にとって就職の準備は、産業界との接点だけを意味するのではなく、入学時点からの大学生活全体を通して積み重ねられた種々の経験が土台となっていることをわれわれは実感した。そして、就職活動も大学生としての諸経験も共に自己の内で統合させる援助をすることが、大学としての就職支援に不可欠であるという仮定のもとで、個々の学生が、大学での諸経験を通して就職活動時に必要となる能力や態度の獲得とを関連付けられるような用具や資料を作成すべきである、という結論に達した。こうして、最終的に現在のRCCの構想ができあがった。

後にWeb版も開発したが、その背景には、RCCは、学生自身が自分の課題を見つけ、目標を定めて努力することで成長の過程を認識できる使い方をするためには、複数回RCCに回答して、成長の軌跡を自分で認識できる構成が望ましいし、学生自身が在学中に複数回アクセスできる工夫がほしい、という大学関係者からの要望があった。「大学生という存在は個別な存在であるが、教育機関を離れて社会で自立的に生きる状況に移行する時期に在るという現実はすべての学生に共通する」というキャリア発達の理念を基盤とするとき、すべての大学、大学院の学生が在学中にRCCに複数回アクセスすることで、自分の課題に気づき、大学が提供する援助を効果的に活用する動機付けとなり、かつ自分の成長を認識できる手段となる。複数回利用できることは、RCCの重要な特徴といえる。

こうした現実的な議論を踏まえて決定されたのが「RCC就職レディネス・チェック」である。RCCに取り組むことで、学生が、就職活動を通してキャリア発達を促す力と態度を育てることができる。なぜなら、RCCの各項目は自立的に社会に生きるための情報そのものであるからである。言い換えれば、学生は、RCCを通して、自己の状況を理解するだけでなく、就職後も役立つ情報や課題解決行動を見つけるのに役立つ情報を獲得できるからである。

このような思いで開発されたRCCも、公表後5年が経過した。その間、大半の大学では、就職指導部(課)名をキャリアセンターへ変更し、さらに、カリキュラムの中に全学生、大学院生対象にキャリア教育という授業を創設した大学も少なくない。他方、就職希望学生は、企業面接の解禁日の度重なる変更や急速に売り手市場化したといわれる日本経済界の変動等、自分達の努力の及ばない変化に立ち向かわなければならない現状に置かれている。このような予想不可能な環境の変化は、RCC開発時よりも一層激しくなっていくと想像される。

他方で、本稿を執筆している今、巷では就職活動中の学生だと一目でわかる、20年程前と変わらないリクルートスーツに身を包んだ若者が行き交っている。彼らの前では変化する社会の流れは一瞬止まっているかのような錯覚に陥ってしまう。しかし、これも若者の生きる現実であることに気づいたとき、あらためて教育機関における就職支援の現代的価値を考えざるを得ない。そして、若者の現実を直視すれば、RCCの今日的意義は変わりないと思う。大学等の就職支援・キャリア支援担当者の協力を得ながら、構成項目等の検討は継続したいと考えている。

なお、RCCは当初、一般の教育機関を対象にしていたが、若年者の就職支援に非常に大きな役割を担う職業訓練校や地域若者サポートステーションなどの就労支援施設においても、非常に役立っていると伺っている。開発者としてうれしいかぎりである。